

6 1

## 【看護学科】

### 論文問題

2024(令和6)年度

#### 【注意事項】

- この問題冊子は「論文」である。
- 試験時間は120分である。
- 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
- 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
- この問題冊子の印刷は1ページから4ページまである。
- 解答用紙は問題冊子中央に2枚はさみこんである。
- 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙が不足している場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
- 試験開始後、2枚ある解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること（1枚につき受験番号は2箇所、氏名は1箇所）。
- 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
- 問題番号に対応した解答用紙に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
- 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字記入すること。なお、解答は1マス目から書き始め、文と文の間に空欄を入れないこと。
- 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
- 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
- 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
- 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。



[ I ] 以下の課題文は、村上靖彦による著書『ケアとは何か』の一節である。後の設問に答えなさい。

「お食い締め」という実践がある。人生の最期にさしかかって、自由にものを食べることがついに難しくなってきたとき、家族に見守られながら、本人がとりわけ食べたいものを食べるという行為だ。先のお寿司の例もその一種といえるだろう。

お食い締めを実践してきた言語聴覚士である牧野日和の本から、もうひとつ例を引く。

裕子ちゃんは小学3年生のときに神経難病にかかり、胃ろう<sup>(注)</sup>を造設し禁食になりました。裕子ちゃんは食べたいと訴えましたが、お母さんは「元気になら食べようね」とごまかしました。そして、裕子ちゃんはみるみるうちに身体機能が低下。胃ろうのまま約2年間過ごしました。[...]裕子ちゃんの身体はやせ細り、全身の筋力が衰え、ぐったりとしています。余命1ヶ月となり、お母さんは焦りました。「また食べようね」とごまかしたことを罪悪感として背負い続けてきましたからです。お母さんは訪れた私に、なんとかして最期に口から食べさせてあげたいと懇願しました。

裕子ちゃんの「食べたい」という願いは医療的な判断によって妨げられてきた。だが、死が近づいてきたとき、そのことに母親は「罪悪感」を感じる。それゆえ、願いを叶えたいと懇願する。母親の懇願は、子どもが食に対して抱いた<小さな願い>が、本質的な重要性を持つという直感(確信)に由来するのだろう。誤嚥性肺炎のリスクがある際には、通常はタンパク質を食べることは避ける。「すぐに命を落とすかもしれません」と牧野は母親に告げた。しかし、母親と主治医の熱望に背中を押され、母親が食べさせたいと願った手料理のプリンを食べさせることに決める。続く場面を引用する。

二口めのプリンも一口め同様、のどの奥にゆっくりと落ちていくのが見えました。しかし、  
えんげはんしゃ すぐには嚥下反射が起きません。「誤嚥したのでは！」と危惧した瞬間です。裕子ちゃんののどがゴクンと反応しました。様子を見守っていたお母さんは、「食べた、食べた！」と言って号泣しました。そして、「裕子もありがとうって言ってます」と言うのです。その言葉で私は裕子ちゃんを見て、魂が震えました。なんと、無反応、無表情だった裕子ちゃんの頬を大粒の涙が大量に流れていたのです。母の言うように裕子ちゃんは食べたかったのです。

プリンを食べたことで「無反応、無表情だった裕子ちゃんの頬を大粒の涙が大量に流れて」、失いかけていた生気を裕子ちゃんは取り戻す。生気とは<からだ>そのものだ。このあと裕子ちゃんは主治医の予想を遥かに超えて10ヶ月間生きた。「食べる」という<からだ>の基本的な快と願いが、生を支えた。こうした実例は、統計的なエビデンスとは異なる次元で重要な意味を持つ。むしろ、内側から感じられる体感であるがゆえに、その重要性は客観的なデータには現れにくく、個別のライフストーリーを通して見えてくる。

ここでは、母がつくったプリンを食べるという経験は取り替えようのない個別性を持つ。誤嚥性肺炎のリスクを冒してまで、母がプリンにこだわったことには理由があつただろう。裕子ちゃんの

人生と母親との関係全体に関わる何かが背景にある。母親がつくったプリンは、裕子ちゃんが元気だったころの好物だったのかもしれない。<小さな願い>は、個別的なものであり、それゆえ必然的に人生のストーリー全体を背負う。

大事なことは、食べたいという裕子ちゃんの願いが叶ったことだけではない。願いを叶えることで、離<sup>そこ</sup>離が生まっていた親子がもう一度つながり合ったということも大きな意味を持つ。本当に裕子ちゃんが「ありがとう」と言おうとしたのかどうか、それはわからない。しかし、涙を流すという応答は、母親によって感謝として受け取られた。このとき、<出会いの場>が開かれたといえる。本当の気持ちをごまかし、避け続けるなかでそれ違ってきた母娘が、願いを叶えることにより、コミュニケーションを取りなおしている。食べ物という<小さな願い>は、実は親子関係全体の焦点であったのだ。<からだ>の肯定が<出会いの場>を開き、親子関係を再編成したのである。

(出典：村上靖彦『ケアとは何か』、中央公論新社、2021)

(注)胃ろう：腹部に小さな穴を開け、チューブを通し、直接胃に栄養を注入する医療措置

(1) 下線部の「統計的なエビデンスとは異なる次元で重要な意味を持つ」とは、裕子ちゃんと母親にとって具体的に何を示しているか。本文中の言葉を用いて、150字以内で説明しなさい。

(2) 課題文をふまえ、人生の最期にさしかかる患者とその家族に対する関わりについて、看護職を目指すあなたの考えを450字以内で論じなさい。

[ II ] インターネットを用いた情報収集に関する以下の図を読み取り、設問に答えなさい。

(1) 図1, 図2, 図3から、日本人のインターネットを用いた情報収集に対する態度の特徴を、300字以内で述べなさい。

(2) あなたやあなたの周りの人が、インターネットを用いて健康や医療に関する情報を収集する具体的な場面を一つ挙げ、その際に日本人の情報収集に対する態度が及ぼす影響と必要な対応策について、400字以内で論じなさい。

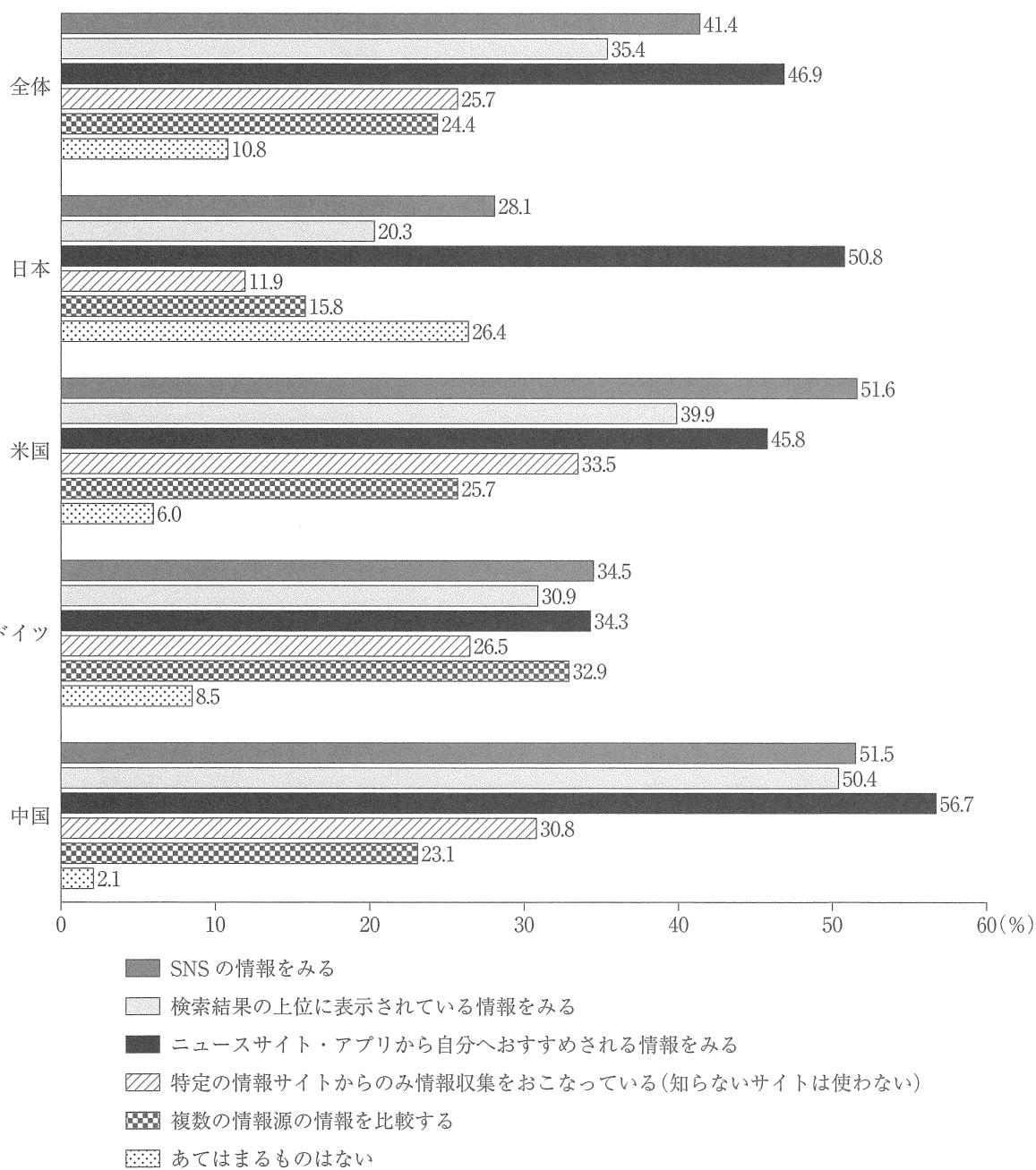


図1 オンライン上で最新のニュースを知りたいときの行動(国別) (回答者数=4,000)

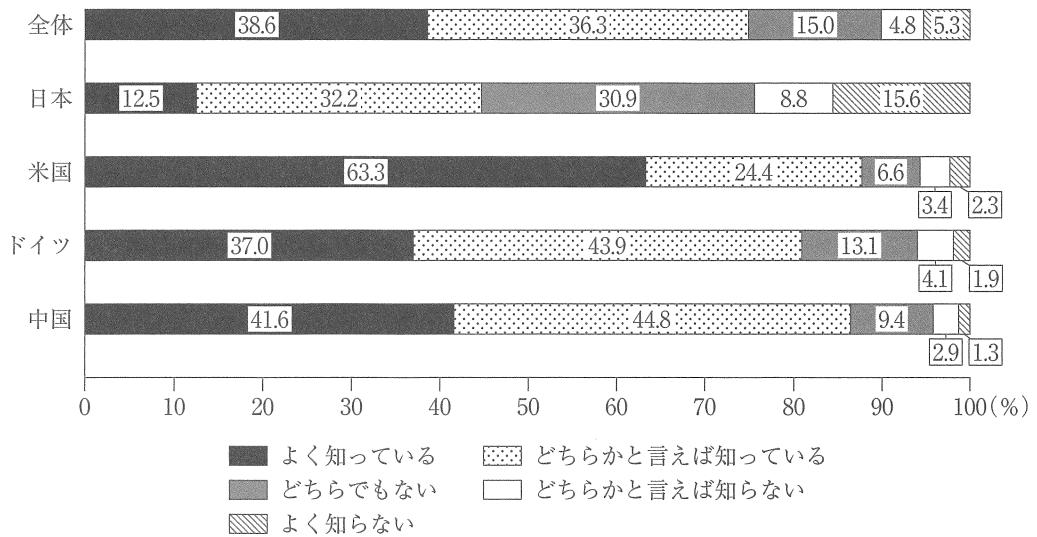


図2 検索結果やSNS等で掲示される情報がパーソナライズ<sup>(注)</sup>されていることへの認識の有無(国別)  
(回答者数=4,000)

(注)

パーソナライズ：利用者の属性、検索・閲覧履歴、現在地などのパーソナルデータに基づき利用者一人ひとりに合わせて、提供する情報の内容や表示順序等を変更すること。具体例として、属性、検索・閲覧履歴などが類似する利用者が選んでいるコンテンツを「おすすめ」として表示する、SNSにおける行動（「いいね！」やコメント投稿など）に応じて、利用者が関心を持ちそうな投稿を優先的に表示する、などがある。

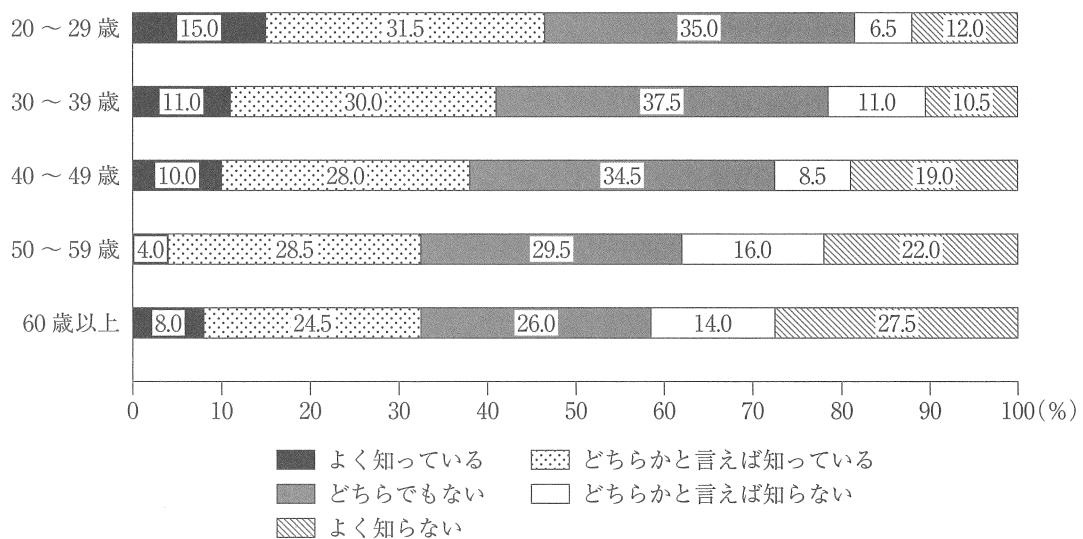


図3 SNS等で自分の考え方方に近い意見や情報が表示されやすいくことにに対する認識の有無(日本 年代別)  
(回答者数=1,000)

(図1～3の出典 総務省「ICT基盤の高度化とデジタルデータおよび情報の流通に関する調査研究」，令和5年度情報通信白書、2023年 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintoeki/whitepaper/ja/r05/html/datashu.html> 一部改編)